

—特集「内科学の新たな展開：救急・総合診療領域（1）」—



巻頭言

高木 元

日本医科大学付属病院総合診療科

内科学，特にER（Emergency Room）を担当する救急・総合診療領域において，総合的な診療は社会的にも重要かつ必要な領域です．特に診療科が細分化された大病院においては縦割り型の各科の診療を横断的につなぐ役割に加え，各科の診療内容を第三者的にチェックする機能も担っています．加えて日本医科大学救急・総合診療センターは東京都内の東京ルール（救急患者が迅速に医療を受けられるよう，地域の救急医療機関がお互いに協力・連携して救急患者を受け入れる制度）対応医療機関でもあり，日夜多数の救急車を応需しています．よって，かかりつけを問わず，疾患を選ばず，急な病態をお断りしないことを目標とするわれわれの診療体制は，働き方改革を踏まえた十分な対策が必要です．加えて，将来確実に訪れる超高齢化社会，世界的にも日本で高頻度に生じている異常気象による自然災害などを踏まえ，現代日本医療の問題点である厳しい医療提供体制や医療経済状況などのいかなる環境においても，急性期から慢性期までの様々な医療を迅速に提供できるよう，柔軟かつ幅広い視点での診療の実現化を目指しています．

一方，現代社会は，AI（人工知能），ロボット，IoT（モノのインターネット化），ICTの高速化（5G），ビッグデータの活用など，革新的な技術の進歩により大きな変革期を迎えました．サイバー空間も積極的に活用した取組を通じた新しいサービスの提供が，今後人々の社会に豊かさをもたらすと思われます．医療・医学の分野においても医療DX（デジタルトランスフォーメーション）により発展しつつあり，アナログ（診察）とデジタル（電子カルテ等）はすでに共存できています．よって救急・総合診療領域においても診療業務を正しく効率化し推進することが医療の発展には不可欠です．

今回の特集では，内科学の新たな展開を目指して日本医科大学総合診療科が着目し取り組んでいる研究の一部とともに，幅広い視点を目指した医局員の海外MPH取得までの道のりをご紹介します特集を組ませていただきました．ポードレスな視点で取り組んでいるわれわれの果たすべき役割への探求をご覧いただければ幸いです．